

戦争心理の一節

速　水　湜

私の演題は戦争心理と云ふことにして置きましたが、幾分か是は羊頭を掲げて狗肉を賣ると云ふやうな譏を受けるかも知れませぬ。實は私は心理學のことを少し許り研究して居ります者で、今日戦争と云ふことは餘程一般の人の注意を惹いて居ることでありますので、戦争に關係した心理學的方面のことを御話したならば、今日御來會諸君が多少興味を感じられる點もあらうかと云ふやうな考から斯様な題に致しましたのでございます。しかし、戦争心理も種々な方面からこれを研究することが出来ると思ふのであります。即ち實際戦闘に従事して居る軍人が戦争中に如何なる心理状態になつて居るかと思ふのを研究するのも一種の戦争心理である。是れは個人的方面から考へることも出来ずれば、一つの軍隊としての團體の行動即ち群集心理或は社會心理の方面からして團體の精神状態を研究すると云ふことも出来るのであります。恐らくさう云ふ方面に就て話をすると思ふ御考の方が多いだらうと思ふのであります。私も亦さう云ふ方面に就て多少お話をしたい點もあるのでありますが、併し此方面に就きましてはまだ材料を集めて居りますので未だ充分にお話するだけの事柄を有つて居りませぬ。又随分長くもな

りますので、短い時間に私の考へて居ります事をお話すると云ふことも或は出来ないかと思ひまして、假りに戦争心理の一節と題しまして少し他の方面のことに就てお話して見たいと思ふのであります。

戦時の状態と云ふものは人間の精神上に非常なる感動を與へて居るものでありますから、單り戦争に従事されて居る者ばかりでなく、一般の人々も普通の精神状態ではない。感情の方面から言へば昂揚した状態になつて居る。注意の方面から云へば緊張した状態になつて居るのでありますから、多少普通時の心理状態とは異つて居る所がある。其結果として起るところの一の事實と致しましては、凡て戦時に於て行はるゝところの風説とか或は新聞紙其他に現れるところの戦争に關する記事報告等の上に、非常に事實と違つた事柄が多いと云ふことがあると思ふのであります。例へば今日獨逸の兵隊が非常な蠻行をして居ると云ふことに就ても、實際の事實は或は評判程のものでなからうと云ふことも察せられるのである。事實が餘程誇張されて現れて居ると思ふ。戦時に於ては斯様な詐が平時に比べて特に著しく行はれて居ると云ふことを少し心理上の方面から考へまして、何故さう云ふ風になつて來るか。之を少しお話して見たいと思ふのであります。

其事をお話するに就きまして、少しく一般の心理上の事實に互りまして、吾々の所謂詐を言ふ場合……人間が事實と違つた事を言ふたり或は書いたりする場合といふものは如何にして起つて來るかと思ふことから話を進めて行きたいと思ひます。先づ虚欺の陳述或は敘述と云ふやうなことを二つの種類に分け

ますと云ふと、實際詐を言はう、人を欺いて何かそれを利益にしようと思ふ考へで、意識的に、或は有意的に詐を言ふと云ふ場合と、無意識的に、自分は別に詐を言ふ考はなくして自から其ことが詐になつて居ると云ふ無意識的の詐、この二つの種類があると思ふのであります。普通吾々が詐と云ふことを申す場合には多くは有意的にやる方の場合を指して居るのでありますけれども、實際の事實に於ては寧ろ無意識的に行ふところの詐が餘程多いのであります。昔からよく落語家などが引きまますところの川柳にも「講釋師見て來たやうな嘘を言ひ」と云ふことがありますが、何でも吾々が實際に見聞したところの事、實際に経験したところの事柄と云ふものは是非非常に確實なものであつて、それを吾々が述べる時には確に見たものである聞いたものであるからして間違は無い、正確なことであると、斯う吾々は考へるのであります。しかし實際調べて見ますと、吾々の直接に経験した事柄に就て不知不識間違つたところの報告をして居ると云ふ場合が非常に多いのである。寧ろ之を極端に言ひますれば、間違ふのが當り前であつて、間違のないのが詐であると思ふことすらも心理上からは言へると思ふのであります。即ち人間の眼なり耳なりに訴へて経験するところの事柄と云ふものは、最初から既に間違つた觀察をして居る、詐の觀察をして居る場合が非常に多いと思ふ。

二三の例を取つてお話しして見ますならば、例へば時間の長短と云ふこと、何の位の時間が経過したかと云ふことを心理學上實驗的に調べた結果がありますが、例へば一つの音を出しまして、それに續いて又

一つの音を出す。一定の間隔を置いて音を出しました場合に、何の位の時間を隔てて音が出て居るかとか云ふこと。之を多くの人に就て大體の所を言はせて見ますと、固より想像で大凡の見當を付けるのでありますからして一定しないのは當然であります。其一定しない程度が非常に甚しいと云ふことが事實分つて居ります。即ち極く短く判断した人と長く判断した人との割合を取つて見ますと、二倍にも三倍にも、或は四倍にも五倍にもなる、是れは直接経験したのでありますけれども、経験した時に既に事實とは違つて居る。一種の無意識的の詐と見なければならぬ。數に就ても、例へば、何の位の人數が集つて居るかとか云ふことを觀察する場合に、是は軍人の方々は殊に其等の人數の推定と云ふやうなことに就ては平生から能く修養されて居ると思ひますが、それも割合に長い間注意を其方に向けた場合には比較的精確な數が出ますが、之を極く短い時間に見せて其數を言ひ當てさせたと云ふ場合です。かう云ふ實驗があります。例へば白紙の上に五十個の點を亂雜に置きまして、それを數秒の間多數の人に見せて何の位の數が紙面の上に見れて居つたかと云ふとを書かして見ました所が、最も少なく判断したもので二十五、最も多く判断したもので二百、二十五から二百の間を往來した答を得たと云ふ事をミュンスタールベルグと云ふ學者が報告して居ます。時計仕掛にして置きまして、一つの針が時計のやうにグルグル廻る、一定の速力で廻つて居るものを被験者に見せて置いて、そして何の位の速力で回轉して居るかとか云ふことを當てさせる。其結果を見ますと、一秒間に何の位の速力であると云ふことを申す人もありませ

うが、中には、例へば蝸牛の這ふ位の速力であるとか、犬が走る位の速力であるとか、或は自働車の疾走する位の速力であると云ふやうに、物を以て速力を現す人もありますが、此場合に極く遅く觀察した人は蝸牛の這ふ位の速力だと云ひ、速い方に取つた人は急行列車の走る位の速力だと云つて居ます。か様に甚だしい相違が現れて居ます。是等は西洋で多くの學生殊に大學の生徒に就て實驗した結果であります。唯、少數の人間に就て實驗しますと左程著しい差はないが、多數の人に就て研究して見ますとそこに著しい差が現れて居る。是は吾々が物を觀察する時に事實を誤つて觀察すると云ふ事柄であります。日常吾々の經驗する事實に就きまして觀察と云ふものに多少想像の加はつて居る場合を例に取つて見ますと此點は一層著しくなるのであります。

元來吾々が物事を觀察する場合には、如何に冷靜な人でも、多少想像の働きを混するものであります。元來全く想像の働きが加はらずして純粹に觀察すると云ふことは殆ど不可能と申して宜いのであります。例へば月の上つて居る時に、月の大きさが何の位に見えるか、實際吾々の眼に映じて居る大きさは何の位に見えるかと云ふことを、多數の人に尋ねて見ると、皆違ひます。非常に違ひます。或る人は眼に見えた月の直徑は二三尺と言ひ、或は五六寸と言ひ、又或る人は一尺位と言ひ、又中には四斗樽位な大きさに見えると言ふ人もある。是れは何れが正しいかと言ひましたならば、何れが正しいと云ふこととはない。其人其人に取つて孰れも正しいと云はなければならぬ。けれども人々に依つて多少習慣の違ふところか

らして非常に大きく見る人もあり、割合に小さく見る人もある。其差が二倍三倍或は四倍にも五倍にもなります。

以上は吾々の観察と云ふものが正確なやうであつて、其實或る場合に於ては意外に不正確であると云ふことを示すところの例であります。

唯々観察すると云ふのでなくして、観察したところのものを吾々が記憶して居つて、其記憶したところのものを一定の時日を経てから述べると云ふことになると、更にそこに詐と云ふものが著しく生じて來るのであります。是れが近來心理學の方面では非常に學者の注意を惹いた所の事實であります。成程吾々は物事を忘れると云ふことがありますが、忘れるとか忘れないとか云ふことには關係なくして起つて來は否定することは出來ないのでありますが、忘れるとか忘れないとか云ふことには關係なくして起つて來るところの誤がある。「シュテルン」と云ふ斯方面の心理を特に研究した學者の如きは記憶には始から誤があるもので、誤のない記憶は普通のものでない、例外であると云つて居ります。それで近頃の心理學では叙述の心理と供述の心理と云ふ語を使つて、特にさう云ふ方面に就て研究をし、又それに就ての特別の雜誌も出て居る位であります。此叙述の心理と云ふ事は吾々の實際生活の上に密接な關係を持つて居るものであります、例へば法廷に於きまして、證人が自分の見聞した所の事實を述べる場合に於て、自分が實際見聞したのである、確に是れ／＼の人の行つた事は自分が見たのであると言へば、是れ位確

實な證據はないと、考へられるのでありますが、此の點から申しますと、それは非常な誤りである。必しも其人の言ふところの事柄が、自分に於て正直なることを言つて居る、詐を言つて居るのではない、確かな事實を言つて居るのであると云ふことを言ひましても、而も其言ふところを正確なものとして全然信用すると云ふことは出来ない。一時獨逸で此事に關する實驗が流行の様になつて多數の學者が種々な實驗をして居ります。

一二の例を取つてお話しして見たいと思ひます。例へば獨逸の伯林大學にリストと云ふ學者がある。是は刑法、刑事政策を研究して居る有名な學者であります。此人が大學の教室に於て講義をして居ります時に、聽講して居る學生が突然立つて先生に何か議論をふきかけた。所が他の學生が立つて其者の言つたことを反駁して、終に兩人が非常な議論を始めた。先生はジツトして聽いて居つた、所が兩人は激論を戦はして終に腕力に訴へて喧嘩をすると云ふやうなことになつて、一方は懷からピストルを出して打たうとする。滿場大騒ぎになつた。そこで先生が中に這入つて其争を止めた。それから後に、實は今此兩人が喧嘩をしたのは、是は初から目論んであるところの芝居であつた。此事實の初から終に至るまでの顛末を諸君が成可く悉しく成可く正確に書いて貰ひたいと言ふて學生に書かせたのであります。そして初から終に至るまでを凡そ十四位に區分して、其書いたところの記事に何の位の間違があるかと云ふことを調べたのであります。無論さう云ふ事柄が突然に起つて來たのであるから聽いて居つた學生は

非常に熱心なる注意を以て聽いて居つたのでありますが、それにも拘はらず其時の答の誤と云ふものは、調べた結果に依りますと、最も少い者でも凡そ二六パーセントは誤つて居る。即ち誰が始めて議論を仕掛けたか。それに對して何う云ふ議論をしたかと云ふ様なことが一々違つて居る。最も多いのでは八〇パーセントの誤があつた。斯う云ふことを實驗したのであります。

此リストのやりました實驗と云ふものも随分有名なものになつて居りますが、是れよりも私が近頃讀みましたものに割合に面白いものがありますから、同じ様な事ではありますが、それをチョットお話して見たいと思ひます。

諾威の首府クリスチアナと云ふところの心理學の研究室でやつた實驗であります。斯う云ふ實驗をやつた。シュルツと云ふ教授がやつたのでありますが、シュルツが講義中に突然一人の男が闖を排してやつて來た。其男は三つの箱を持つて來た。そして其箱を教授の傍へ持つて來まして机の上に置かうとした。其際に一つの箱を何うかした機みで床に落した。そこで落ちた箱を取りまして、それから後に教授に向つて、是が出来ましたと言ふて勘定書を教授に渡した。講義最中に職人のやうな男が箱を持つて教室へ這入つて來るのは非常に奇妙のことであるから、満場の學生は熱心に注意して見て居つた。さうすると教授が言ふのに、出來たか宜しい。そう云つた切りで講義を續けた。其男は少し躊躇しながら「親方がすぐ勘定を貰いたいと云つて居ました」。教授は靜かに「又來るがよい、今邪魔をしては困る」、其男は

再び「親方がすぐ勘定を貰いたいと云つて居ました」。教授は叮嚀に「オイ、君、今は兎に角歸つて呉れ」其男は其處を去つて普通の通り授業は續けられた暫らくすると其男又もや教室に這入つて來て机上の箱に近づいて其中の一個を手にとつた。教授は其男に近寄りながら、「又來たな、一體どうしたんだ、今は講義中だから、歸つて貰はねばならぬ。」其男曰く「ハイ、しかし、……教授ふと氣が付いて、「ア、さうか、今貰つた勘定書は多分受取がしてあるだらう」と、云ひながらポケットから勘定書を出して見ると果して受取がしてある。そこで其受取證を渡しながら「是れでよかろう」と云ひながら、一冊の書を其男に渡した。「是はお前の主人に約束した目録だ。是を持つて歸りなさい」其男は「左様なら」と云つて帽子を被つて歸つた。斯う云ふ事實なのです。

そこで此事件に就て其の顛末を學生に書かせて見た。是にも或る時は何う云ふ目的であると云ふことを告げてやつたのもあれば、何も言はずに偶然其事柄が起つて來たかの如くにしてやつたものもあります。雙方比較して實驗したのです、さうすると學生の報告に何う云ふことが現はれて居るか。是も悉く申せば長くなりますから、唯々私の今日の話に關係ある部分だけを申します。

第一、實驗をやるには、初から餘程練習させて置きまして、そして其職人體の男が教室に這入つてからの態度と云ひ、又言葉遣と云ひ、總て出來得るだけ慇懃にして、少しも迫ると云ふやうな、又不遜なやうな態度の表はれないやうに練習させて豫め準備して置いたのであります。又教授の方でもそれに對

して少しも感情的の舉動を表さないで、極めて冷静に話をした。斯う云ふ態度でやつたのであります。ところが學生の報告を見ると非常に間違つた點がある。其這入つて來たところの男は如何にも金を貰はなければ承知しないぞと云ふやうな心持で初からやつて來た、實に怪しからぬ奴だ、譯の分からぬ男だと云ふ風に書いて居るのが多いのです。是れは教室で講義をして居る際に這入つて來ると云ふことは既に普通の事柄ではないと云ふ考が先入主となつて居て、さう云ふ考を有つて見て居るから、極めて慇懃に冷静なる態度で言つて居ることも餘程感情を帯びたやうな調子に聞えたのであります。又初め這入つて來て、一旦教室を去らうとして再び教授の傍に來たのでありますが、初め教室を出やうとした時までの誤と云ふものと、二度目に教授の傍へ來た時からの誤とを較べて見ると、後の方が著しく其誤が増加して居る。是れなども何う云ふ譯であるかと云ふと、一度去らうとしたものが又やつて來ると云ふのは實に不都合な奴だ、講義中だからと云ふて返したのにそれを肯かずに再び教授の傍へ行くのは怪しからぬ奴だと云ふ考が各自の頭腦に這入つて居りまして、さう云ふことになるのです。又其男は一本の杖を持つてやつて來たと書いてある。杖などは持つて居らなかつたのであるが、杖を持つて這入つて來たと云ふ報告をして居る者が二三あつた。是はどう云ふ譯であらうかと云ふことを心理的に考へて見ますと、初に男が箱を持つて這入つて來て、其一つの箱を落した、ガタンと床の上に落した。其音を聞いて居る。併ながら其時の學生の状態では、其落ちた物が何であるかと云ふことを注意するまでに至つて居らぬ。

音だけが耳に這入つて居つた。そこで何か音のするものを持つて來たと云ふ考が頭腦にある。別に杖を持つて來たと云ふことを判然見た譯ではないけれども、さう云ふ考が無意識的に働く爲に杖を持つて來たと云ふ風に解釋したのである。

其外いろ／＼な事柄がありますけれども、兎に角吾々が普通考へる所では、一同が非常な注意を以て見て居つたのでありまして、其見て居つたところの事柄を直に書いたのでありますから、是れ位正確なものはない、殆ど誤のない報告をしさうなものでありますけれども、それが非常に間違つて居る。教授の態度に就ても或るものは非常に慇懃に挨拶したと云ひ、或るものはまるで其男を無視した態度で對したとも書いた。か様な事は諸君が若し實驗的に兵隊などにやらせて御覽になつたならば恐らく豫想外の誤があると云ふことに御氣が付くであらうと思ひます。

そこで此人のやりました研究なり又前に申しましたリストの研究などに就て、茲に注意すべきところの事實と云ふものがあるのであります。凡て見た所のものを報告すると云ふ場合に就きまして、先づ普通の考に依りますと、見てから後比較的時日を経ない間の報告と云ふものは割合に正しい。時日を経るから後には忘れたり何かするから誤が多くなつて來る。若し精密に誤の割合を計算したならば、時日を経た後の方が餘程誤が起つて來さうに思ひますが、所が、此等の研究の結果に依りますと寧ろ反對であります。其日に書かせた報告と、數日經つてから後に書かせた報告と、其結果を較べて見ると、其日に書

いたものゝ方が間違が多く、數日経てから後のものが却て真に近いと云ふ結果を得た。是は何う云ふ所から説明するかと申しますと、凡て吾々が事物を観察する場合に於きましても、多く感情の伴つた場合には間違が起り易いのです。全く冷靜になつて居れば比較的間違は少い。感情の激昂した場合と云ふものは比較的誤が多い。多少時日を経ると感情が冷靜になる爲に其報告と云ふものが真相を得るのであると考へられます。

此等の事柄に就て考へて見ますと、つまり吾々の詐の中で、即ち間違つた叙述又は報告をするに云ふ中で、無意識的にやるところの詐と云ふものは何う云ふ所から起つて來るかと申しますと、第一には吾々の觀察其ものが既に間違つて居るのです、間違つた觀察をして居る。即ち吾々の注意が初めから不十分である、或は注意の向け方が間違つて居ると云ふことからして觀察が間違つて來る。それから其見た事を述べる場合には記憶の誤がある。此記憶の誤と云ふものは誰でも免れることは出來ないのであります、非常に正確な觀察をする人でも、實際經驗した當時の知覺と、今度それを述べる時の間には差異が生ずる。即ち或るものを附け加へたり或は減じたりすることがある。是れは殆ど免れないのであります、或る意味から云ひますと、吾々は間違はずして全く同一の事柄を記憶に依て喚起すと云ふことは殆ど不可能であるのです。次にそれを述べる場合に誤を來す原因としては、例へば暗示の影響と云ふものがある。是は法廷に於ける裁判に就て申せば能く分かりますが、犯罪人が裁判官に調べられると

云ふ場合には、御承知の通り法廷に於て宣誓をする。先づ第一に詐を言はぬと云ふ宣誓をする。裁判官が列席して非常に森嚴なる有様を呈して居る所の法廷内で宣誓をした上で調べられる。モウ法廷に這入つた時の罪人の心理状態と云ふものが普通の場處に居る時の心理状態とは餘程違つて居る。そこで裁判官が、お前は何時何日はれ／＼の事をしたらうとか、或は其時にお前は何處ソコに居つたらうと云ふことを森嚴なる調子で問ひ掛ける。此時には犯罪人の方から云へば、裁判官の言葉つきなり又其態度からして非常に暗示的影響を受ける。暗示と云ふものは御承知の通り吾々が不知不識の中に他人から受けるところの影響である。子供など十分精神の發達し居らない者は著しく暗示の影響を受ける。例へば先生が兒童に質問する場合に於きましても、此繪の中に犬が何匹居るか。斯う云ふて質問をする。さうすると子供は直ぐに手を舉げて、犬が三匹居りますと言ふ。其實其繪の中には犬は居ない。猫ばかりである。けれども犬が何匹居るかと言ふて問ひ掛ける。冷靜に見れば猫が畫いてあると云ふことが分るのでありますけれども、犬が何匹居るかと言ふから、犬と云ふことにして了つて、犬が三匹居りますと答へる。是は教師の質問其ものに一種の暗示を含んで居る爲に不知不識それに對する答をするのであります。同じ質問でありましても、お前は昨日何處に居つたか、斯う云ふ質問と、お前は昨日何處ソコに居たらう、それに相違ないだらう、斯う云ふ風に言はれるのは非常に違ふ。是は無學なもの、精神の薄弱な者であると、殊にさう云ふ暗示の影響が著しいのであります。それ故に豫審で犯罪人を調べる場合にも、頭

から疊みかけて、其方は是れ／＼の事をしたらうと云ふて非常に嚴重な訊問を受ける、殊に徹夜をしても調べられると云ふので非常に其人間は疲れて了ふ、疲勞して綿のやうになつて居るにも拘はらず嚴重な訊問をすると云ふ場合には、質問の方から來る所の暗示的影響が著しく其人を支配して了ふ。其處で非常に嚴重な拷問的な訊問をされる爲に犯罪人は自白して、確に其通りでございませぬ、何時何日はれ／＼の事をやつたに相違ありませぬと云ふ自白をする。サア罪人が自白をしたからは程確かな證據はないと云ふので、直ぐに之を公判の方に廻して了ふ。所が實際非常に嚴重な訊問を受けた爲に、今お話ししたやうな譯で、自分は無罪であるのに自分が實際犯罪をやつたやうな氣持になつて服罪すると云ふ場合が稀でないさうであります。それに就ても實際の例などもあります、餘り長くなりましますから省いて置きますが、さう云ふ風に考へますと暗示の影響から來るところの誤つた報告なり誤つた陳述と云ふものが起つて來る譯であります。

今之を戦争の場合に應用して少し考へて見たいと思ふのであります。戦争の行はれて居る場合に於て吾々の精神状態は何う云ふ風になつて居るかと申しましたならば、敵國に對して恨を持つて居りまして、出來得るだけ多大の損害を敵に與へて、さうして起つことの出來ないやうにして了はふと云ふことが戦争の目的でありますから、非常に憎惡の念又は憤激の念が加はつて居るのであります、吾々の感情の状態から申しますと、餘程激昂した、昂揚した状態になつて居ると云ふことは否定することが出來ない

のであります。單り戰鬥に従事して居る者ばかりでなく、一般の人も普通の状態に於て見ることの出来ないやうな状態になつて居る。さうして身體なり精神の方から申しまして、長く戰爭をすると云ふことになりますれば非常に其状態が緊張して居りまして、それが爲には多くの人が疲労して居る。心身共に疲労して非常に注意を緊張させて居ると云ふやうな状態に於ては、先程申上げました暗示の影響が非常に昂まつて居るとは一般の事實であります。のみならず、又觀察なり記憶の働きに於きましても普通の状態とは違つて居る、凡て戰爭の状態と云ふものは前に申しました普通の場合でも受けるところの吾々知覺の誤、敘述の誤と云ふものを大きくして行くやうな心理状態になつて居ると思ひます。そこからして一度風説が起つて來ますと、其眞僞に就て冷靜な批判をすることもせずして、非常な勢を以て擴がつて行く、のみならず其擴がつて行く間に於て段々誤が混入して來て終に飛んでもないものとなつて現れると云ふことは、是は先程申しました事柄から考へまして大抵想像の出來ることであらうと思ひます。

尙戰爭に於きましては多くの人は普通の刺戟で以て満足することが出來ないやうな状態に在ると思ひます。戰時は非常に氣が立つて居りますから平凡な事柄と云ふものは興味を引かない。何か其處に人の耳目を聳動するやうな事柄がありはしないか。又戰爭其ものが非常に注意すべき著しき事柄でありますから、唯々普通の平凡な事では一向注意をしないと云ふことになりますから、何うしても出來得るだけ物事を誇大にして人の注意を引くと云ふことが總て報告をする側の人の頭腦にあると云ふことが亦一つ考

へて置かなければならぬ事柄であります。

そこで以上申しました種々の影響からして起つて来る所の誤としまして一二の例を擧げて見たいと思ふのであります。

瑞西に於て發行されて居ります或雑誌上に某と云ふ大學教授の書いて居ることではありますが、其中に斯う云ふことがあります。ノルマンジの或小さな街に居る所の子供が戦争に出て、さうして敵の爲に腕を斬られた。其子供の数が凡そ四千人である。四千人の子供が腕を斬られて病院に這入つて居ると斯う云ふ風説が起りまして、さうして現に大學の教授の中の或人が来て、さう云ふ事實があることを聞いたと云ふのです。四千人の子供が腕を斬られたと云へば、非常に殘酷なことであるが、どうも理窟から考へると訝しい。第一、小さな街に四千人の子供があつて、其れが全部戦争に出て皆腕を斬られると云ふことは理窟の上から考へて有る筈はないと云ふので、段々調べて見た所が一向さう云ふ事實はない。其風説の根據とも見らるべきものは何かと云ふと、僅に數人の子供が外科手術を受けたことである。それは戦争のためであつたか何うか判然しないけれども、兎に角病院に這入つて外科手術を受けた結果遂に腕を斬らなければならぬと云ふことになつた。是れが多分風評の根據であらうと云ふのです。一體子供は正直であると云ふけれども、實際は随分詐を言ふものである、又殊に詐を信じ易いからして、初は四人であつたかも知れぬ。四人であつて、四に零を一つ附けると四十人となり、二つ附けると四百人となり

遂に四千人となつたのであらうと、斯う云ふ推測を下して居るのであります。是れなどは餘り確かな事柄でもありませんが、尙茲に斯う云ふことがあります。

奧太利人が塞爾維兵のために暴行されて眼を抉抜かれたと云ふ風説がウィーンで行はれた。ウィーンにロックハウゼンと云ふ教授が有しまして、どうも捕虜にした者の眼をわざ／＼抉抜くと云ふやうな、さういふ非人道的なことがある筈はない、是れ有りとするならば、如何に戦争であるとはいへ野蠻極まるとである、恐らくは事實と違つて居るだらうと考へて居つた。所が、其ロックハウゼンの友人で平生から信用ある人がやつて来て、自分の義兄弟に當る人が某と云ふ病院に負傷者を見舞ひに行つたときに、其負傷者が曰ふのに、自分の隣の寢床に居る負傷兵は、腕に傷を受けて働きの出来ない處を狙つて塞爾維兵が来て眼を抉抜いたと、斯う云ふ話を聞いたと言つて教授に告げた。どうも話を聞いて見ると、まんざら詐ではなさうである。殊に平生信用して居る友人の言ふことであるから、是れはそんな事があるのかも知れぬ、如何にも残酷な話であると云ふので、其負傷兵を聊か慰めてやらうと云ふ考を以て、五十クローネ(約二百五十圓)の金を持參して病院を訪ねた。さうして病院長に會つて斯う云ふ兵隊が病院に這入つて居るさうである、眼を抉抜かれたのは如何にも氣の毒だから慰問に來た、どうか會はせて呉れと言ふと、病院長は暫く考へて居つたが、どうもさう云ふ者は這入つて居らぬ。成程眼の見えない様になつた者は二人這入つて居るが、併し是れは榴散彈に當つて眼を失つた者である、抉抜かれたので

はないと、斯う言つた。そこで、それぢや詐だと云ふので病院から歸つて來まして、どうもあの男はひどい奴だ、豫て信用して居るのにそんな詐を言ふ、不都合だと言つて怒つて居りました所へ、又或人がやつて來まして、町の盲學校に眼を抉抜かれた者が這入つて居ると云ふことを話した。まだ外にもさう云ふ者があるかと云ふので、又其盲學校へ訪ねて行つて、金を寄附したいから會はせて呉れと言ふと、イヤ、さう云ふ者は居らぬ、戦争で眼の見えなくなつた兵隊は來て居るけれども、それは抉抜かれたのではない、併し金を遣ると云ふならば大變有難いから金は頂戴しても宜しいと言つたさうであります、是れなどは全く詐であると云ふことが分つたのであります。此話の如きは甚だ平凡なことであるかも知れませぬが、如何に戦時に於ける事實と云ふものが誤つて報告され而も其れが信ぜられるかと云ふことの一つの例として適當ではないかと思ふのであります。

所が其外にまた詐の起る異なつた種類の原因が伏在して居るのであります。唯今までお話をしたことば病的の詐ではない、普通の人間が特殊な精神状態に在るときには間違つたことでも信ずる、又是れは確かな事柄と思つて信ずるのであります、其處に多少病的の原因と云ふものが加はると又其誤が非常に大きなものになつて來る。其れに就いて一つの例を擧げて見たいと思ふのであります。

御承知でもありませんが、ヒステリーと云ふのは主として婦人に起るところの一種の病氣であります。併乍らヒステリーの状態と云ふものは獨り婦人に起るのみではない、男子にも矢張りヒステリーと

同じ様な精神状態が起ります。此ヒステリーに罹つて居るところの人間の病的の徴候としては虚言を言ふ、嘘を何とも思はずに言ふ。而も其言ふ所の嘘は如何にも巧妙である。一寸考へると成程さう云ふ事もあつたかなと思はず程に巧みに出来て居る嘘を言ふ。所が本人は何か悪意を以て人を欺ましてやらうと云ふ考で言ふのではない——さういふ考の場合もありませうが、多くは然うでない、確に眞實であると信じて居つて言ふ嘘であります。

茲に申します一つの例は英吉利の新聞にあらはれて居つたとであります。十七歳の娘がありました、其娘が自分の姉と、其姉の病氣を看護した看護婦から受けた所の手紙を親父に見せたのであります。姉と申しますのは看護婦として戦地に行きまして、敵兵の爲に非常な暴行を受けて、それが原因となつて病院に這入つて遂に死ぬる。其死ぬる今際の時に自分の妹に宛て、書いた手紙と、其時に側に附いて居つた看護婦が臨終の様を詳しく書いた手紙と、此二通の手紙を親父に見せた。親父は見て非常に驚いた。成程姉は看護婦になつて従軍して居るけれども、併し戦線に出て居るのではなく、英吉利の何とか云ふ街の病院に居る筈である、確に健全で勤務して居る筈であるのに其れが死んだと云ふのであるから非常に驚いたのであります。併乍ら手紙を見るといふと如何にも明細に事實の報告がしてある。そこで半信半疑で段々調べて見たところが全く事實でない、姉はやはり健全で病院に勤めて居ると云ふことが分つた。

そこで段々其娘を調べたのであります。さうして初は確に戦地から来たのであると言張つて肯かなかつたが、非常に嚴重に調べた結果、遂に其手紙は自分が作つたのであると云ふことを白状した。何の爲にしたのかと云ふと、別に何の爲と云ふことはない、唯さういふ事をして見やうといふ氣になつたと云ふのです。其娘は非常に感情的で、殊に戦争が始まつてから非常に亢奮した状態であつて、自分の姉が看護婦になつて戦地に行つて居ることを考へたり、又敵兵が暴行したとか獨逸兵の亂暴したことが新聞に出て居るのを見て其時の有様などを想像したときに、丁度さういふ手紙を書く氣になつて書いたと言ふのです。けれども段々穿鑿して見ると、單に其れだけの原因ではない。元來其母は繼母であつて、繼母と姉妹と非常に仲が悪い。姉の方も繼母のために非常に苛められて居つた。妹は平生から憤慨して居つたので、繼母に對して一種のツラアテと云ふやうな意味でありませうか、即ち繼母に對する仕打としてそんなことをする氣になつた様にも思はれるのであります。さう云ふ點もありますが、併乍ら故らやらうと云ふ考でやつたのでなくして、自然にやる氣になつた。斯う云ふのであります。是れなどは現に姉が生きて居るといふことが事實に於て分つたからして詐であると云ふことも判明したのでありますけれども、假に次の様な場合が起つたと考へたら何うでありませうか。例へば或看護婦が戦地で死んだ。その死んだのは事實である。事實であるけれども、それは別に敵兵の暴行に因るのでも何でも無い、何う云ふ事で死んだのか其死因は一向分らない。又何處で死んだのか不明なと云ふ場合に今の様な手紙が

來たとしたならばどうであらう。無論敵の暴行を受けたと云ふことになつてしまふ。さういふ事實が随分戦争の場合には多い。非常に感情に富んだ人間であるといふと、戦争などの場合には一層病的の徴候が重くなる、非常に激昂した状態になつて來る。凡て戦争などの場合に於て女と云ふものは風説の傳播者になる。元來女といふものは戦争に出ないで家に留まつて居るのでありますが、感情的であるから種々なる風評を傳播する。殊に今度の歐羅巴の戦争の様に、男が全く戦争に出て居ると云ふやうな場合には、女がいろいろ戦争に對する風説の傳播者になると云ふことは考へなければならぬ事柄であります。今お話をしましたやうな間違つた事柄が事實となつてしまつて、確に然うであると云ふ風に考へられて居ることが亦尠くないと云ふことも想像出來ることゝ思ふのであります。又男にしました所が、ヒステリーの如き病狀がない者でも、戦時の亢奮した場合には餘程ヒステリー性になつて居ると云ふことも言へると思ふのであります。

それから又こう云ふ事もあります。戦場に出て負傷した人、又は敵國民から迫害を受けた人などが、其實況を他人に話す際に、別にさしたる深い考からでは無いが、尋常一遍の事では、人の注意を惹かない、何か強い刺戟を與へたいと思ふ所から、不知不識の裡に虚偽の報告を混入し、場合によつては全然無根の事實を創造すると云ふ事も起り得るのであります。是に就ても實例がありますが、長くなりますから略して置きます。

以上お話ししたとによつて私の考へます所では、戦時に於ては、殊に、今度の如く歐羅巴全體が戦亂の渦中に投じて居ると云ふやうな場合に於ては、確かな事實として考へられた事柄が實は非常に誇張されたものであり、又全然無根な事柄を傳へられて、其れが事實有るものと承認されて居ることが尠からずあるだらうと思ふのであります。實際に見聞した報告であるから其材料と云ふものは正確であるとは云へない。今お話ししたやうな風説でなしに、立派な人の書いた見聞録とか報告と云ふ如きものにしても、一から十まで信頼することは出来ないと思ふのが戦時の状態であると考へるのであります。是れは必しも獨逸兵の暴行を辯護するのでも何でもありません。併乍ら獨逸兵の暴行といふやうなことに就いても確に間違つた點もあると思ふ。獨逸人自身も辯解して居るやうであります。餘程事實を間違へたり又誇大視したりして其爲に起つて居るところの虚欺も尠くないと思ひます。戦時に於ける事柄を後から研究する場合に當りましても、どれが真相であると云ふことを判断するときには、唯今申した事柄が或は多少御参考にならうかと思ひまして申し上げます。まだお話を致したいと思ふ所を多少落したやうであります。あまり長くなりますから是れで止めて置きます (完)